



さようなら2020(令和2)年 ～コロナ禍で得た「希望」とは?～

振り返れば、新型コロナウイルスというパンドラの箱が開き、世界はそれ一色の一年でした。アメリカ大統領選や香港情勢などの国際政治でも影響を強く受けましたし、国内政治においても政権交代の原因の一つになりました。経済にとっても同様で、いつ終わるともしれないコロナ不況に世界全体が深刻な事態に陥っています。また、国内外や公私を問わず私たちの日常生活全体に甚大な影響をもたらし、大きな行動変容を余儀なくされました。

さて、本校も前代未聞の対応に迫られました。しかしその中で、コロナ禍でもポプラ祭やクラスマッチ、生徒会やボランティア活動など、工夫をして成果を上げた生徒の皆さんの頑張りには感動させられました。同時に生徒を支える先生方のひたむきな努力、地域に目を向ければ、介護実習を快諾して下さったハートフルケアたてしな様、授業や進路行事の講師などとして本校の教育をサポートして下さった地元の皆様に、心より感謝しております。皆様は、「この時だからこそみんなで協力し合い最善を尽くそう」と考えて行動して下さったのだと思います。

ギリシア神話でのパンドラは、災厄が飛び出した箱の蓋を閉めますが、箱の底に最後まで残っていたものがあります。それは「希望」でした。まだ渦中ですが、皆様の尊い気持ちこそがコロナ禍で得た「希望」ではないでしょうか。来年も多くの「希望」が本校に訪れますように(終業式講話より抜粋)。



卓球台贈呈式(総合運動部卓球部門)

～地域の方の善意に感激～

12月22日(火)、本校のみならず、東信地区の拠点校として日々活動をしている卓球部(総合運動部卓球部門)に、期待を寄せる町の有志(立科地域の卓球競技力向上後援会)から卓球台などの備品が贈呈されました。

後援会の方々は町の施設などで指導する竹前先生を見て、是非協力をしたいと寄付を募って下さいました。本校に対する町の方々の並々ならぬ熱意と善意に、改めて感激と感謝をした機会になりました(裏面新聞記事)。



左より今井様、西藤会長、柳澤君、柴平君、私、竹前先生

困ったお話(その19) (久しぶりの蟻高訪問で思い出がよみがえる)

今月、会議で松本蟻ヶ崎高校(蟻高)へ訪問した。蟻高は私の前任校で、2年間お世話になった。この2年間は良い思い出しかない。蓼高同様、生徒も先生方も素晴らしかったし、事務室の方々とも親しくさせてもらった。数々のシーンがよみがえる。

思えば2年前に蓼科高校へ転勤が決まり、勤務最後の日になった。すると先生方と生徒諸君が、校用技師の千葉ちゃん(仮名)と私のお見送り会を玄関で行ってくれた。花束をもらい吹奏楽部の演奏に合わせ、正面玄関から手を振りながら去る段取りだ。

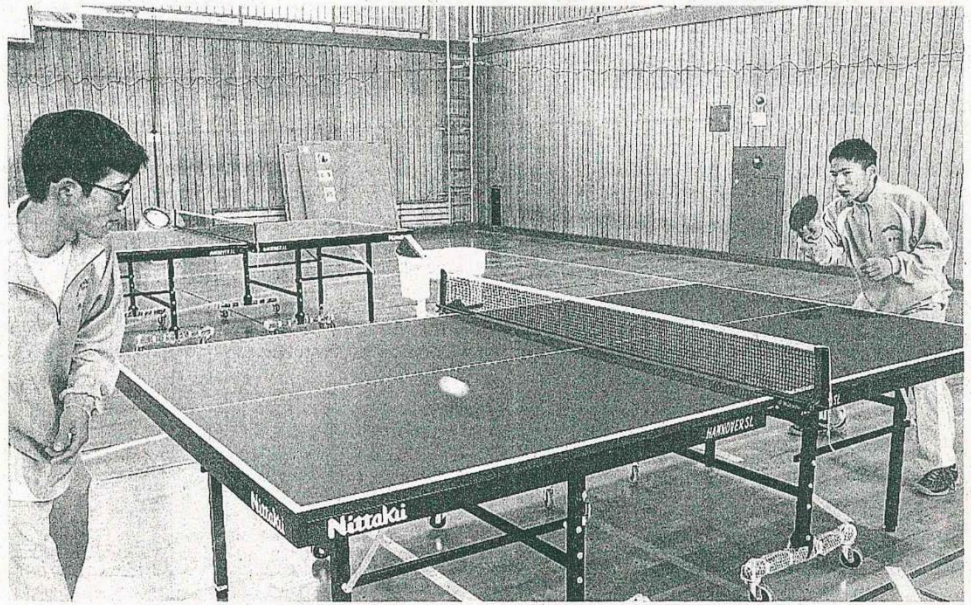
いけない。このままだと泣けて涙の別れになるのは困る。同じ気持ちだった千葉ちゃんと私は、退場の途中で一計を案じ、突如腕を組みバーズロードを歩く新郎新婦に早変わりをした。そのあと、二人でスキップをしながら去っていった。背後から皆の爆笑の音が聞こえた。これでいいと思ったが、そのあと不覚にも涙がこみ上げた。

さて、玄関受付に着いたら、置き土産として私が残していった松澤登美雄作のぶさかわ人形が迎えてくれた。



時節柄、着用中

立科の卓球競技力向上へ寄贈 町有志 蓼科高に卓球台



立科町の有志でつくる「立科地域の卓球競技力向上後援

会」は22日、同町の蓼科高校に卓球台3台などを贈った。昨年発足した同校卓球部を応援する目的。後援会は「立科地域を卓球競技の拠点にした」と話している。

同校の卓球部は、昨年7月

贈られた卓球台を使って練習をする蓼科高校の卓球部員

に発足。現在部員は2人だけだが、同校の体育館に置かれた卓球台は小中高生向けの卓球教室などで広く使われているという。後援会はこうした学校の取り組みを応援しようとして、昨年度から募金活動を行い、卓球台を贈ることにした。

この日は同校で贈呈式があり、後援会代表の西藤努さん(73)が宮沢和人校長に目録を手渡した。式後、体育館で部員2人は贈られたばかりの卓球台を使って、球を打つなどの練習をした。

部長で2年の柳沢宏さん(17)は「新しい台だと球の弾み方や音も違う感じがする。大会に向けて頑張っていきたい」。西藤さんは「卓球を通じて学校生活を充実させてほしい」と話していた。